

尾張における農民闘争と国学の基盤

——草莽の国学者加藤磯足の村政改革運動を中心として——

林 英 夫

一	はしがき	二	民恵錢運動
二	加藤磯足の学問	三	細井平州の教化講談
三	農民闘争の動向	四	自普請発企
四	村政改革運動	五	運動の支持層と磯足
1	天明改革	六	綜括

一 はしがき

尾張国中島郡起村（現愛知県尾西市起町）は尾西織物の中心村落の一つであり、また、美濃路の一宿である。この宿駅の明和から文化にかける頃の本陣職に加藤右衛門磯足⁽¹⁾という言長門の国学者がいたのである。

本稿はこの加藤磯足^{イソジ}という人物を中心として、在地の農民動向を把握しつつ、彼が実践した一連の村政改革運動の中から「草莽の国学」形成の過程と、その現実的基盤に焦点を合せて国学の社会経済史的意義を究明してみたいと思う。

すでに国学に対する社会経済史的接近は伊東多三郎・芳賀登・松本三之介・入交好脩等の諸氏によつて試みられているが、草莽の国学を支える階層的基盤を農民動向の中に密着させて、その村落構造的基盤を定めようとする分析は、なお空白に近い状態といつても過言ではないと思う。だから本稿の課題はこの空白に向つての若干の試みである。

（1）別の視角から私は磯足について「尾濃綿織物地帯における商品流通」（歴史学研究二一九号）の中でふれている。磯足についての研究論文は極めて乏しく、国文学の側から

愛知女子大教授市橋澤氏の戦前の業績として「加藤磯足の生涯」(国学院雑誌昭一五の四)・「亭長加藤磯足」(伝記昭一八の一)・「河の辺翁物語解説」(国語国文学研究六輯)等がある。また、戦後同氏による「加藤磯足の研究磯村」(愛知県立女子大紀要九輯昭三三年)がある程度である。

(2) 国学への社会経済史的アプローチについては幾つかの論稿があるが、伊藤多三郎氏「国学史研究の動向」(史学雑誌五九の一〇)・松本三之介氏「国学政治思想の研究」(有斐閣)・芳賀登氏「天保期国学者の社会的機能」(史潮六四・六五合併号)・入交好脩氏「幕末土佐藩に於ける国学の発展と鹿持雅澄」(社会経済史学二四の四)等は私自身、示唆される点が多かった。

二 加藤磯足の学問

加藤磯足がどのような階層から出た人物であつたかを、まず本論展開の前に検討しておかねばならない。磯足は先祖の由緒について「家系等、委者相知不申、永正年中之比、村方開発の副、庄屋役相勤」と自ら記しているが、この記述と、加藤家の系譜を対照してみると、初代敏弘は弘治元年六十一で歿したところからみて加藤家は戦国末期頃には起村に土着していた模様である。それから三代目の当主の関ヶ原戦争の時、加藤氏は徳川方福島正則軍の木曾川渡河に際し、河瀬の浅深を案内した功によつて、美濃路起宿の本陣・問屋・年寄職に任ぜられたと系譜にも、その後の同家の由緒書の中でも繰返し述べられ

ているから関ヶ原の由緒によつて本陣職に任ぜられたことは事実であろうと思われる。だから、この加藤家は、起村に関するあらゆる史料の検討の上からも草分に近い家(起村は戦国期以後の村)であり、かつ、本陣・問屋・年寄(庄屋の近世初期の名称)を、年寄職を除き幕末まで世襲したこの村の代表的名門であつた。磯足はこの本陣の加藤家十一代の当主として延享四年十一月十日に生まれ、明和七年九月、二十四才の時に家督を相続して苗字帯刀を許され文化六年十月十二日六十三才で歿したのである。⁽³⁾

以上から明らかなように磯足はこの村における最高の政治的立場にたち、自ら直接村政に関与した人物であり、共同体的規制の中心的役割を果しうる立場にあつたのである。

ついで加藤磯足がどのような経歴をたどつて「国学」を志向したか、また彼の学問の性格がどのようなものであつたかについて述べておきたい。磯足の死ぬ三年前、文化三年六十才の著書と思われる「しのぶぐさ」⁽⁴⁾の中で、彼は自分の若かつた頃に關し「磯足若かりしほど、道磨の翁にしたがいて万葉集をはじめ、これかれのふみどもも学びける」と記し、名古屋の国学者田中道磨に万葉集などの古典を学んだことを述べ、かつ「磯足も其頃より教へ子にはなりぬる」と記している。

この田中道磨の教え子になつた年代はこの記述に明らかでないが、道磨は天明四年に歿しているから前後の状況から安永初年磯足二十才台の後半期の入門と推定される。田中道磨は盛時の門人三百人をこしたといわれているが、磯足はこの道磨から

始めて本格的に国学を教授されたものと考えられる。磯足の公用の御用留によると、安永六年十月三十一才の時、大垣藩主が清州宿(美濃路の一宿)止宿の節、藩主が歌道を「御好候由ニ付、右宿迄、御伺ニ参候節、愚詠一首差上候」とあるところから考えて、道磨門に入つて四、五年後と推測される安永六年頃には大名旅中のなぐさめとしての歌を献上しうる程度の、近郷に名声を得ていたことが想像されるのである。

ついで、天明二年、磯足三十六才の年に尾張藩の儒官細井甚三郎平州に入門している。⁽⁵⁾その入門について彼はこう述べている。「(天明三年)正月六日、殿様御師範之御儒者細井甚三郎平州・一号如來山人姓ハ紀、名徳民・字無聲、へ入門いたし、翌七日晚(名古屋)本町四丁目風月堂庄左衛門方ニ而、孝経御講談拝聞いたし候処、至而難有事」とあつて入門の直接の動機については何も語っていないし、また入門の翌日に始めて講義を聞いて感心しているところからみて、彼の学問・思想の発展の結果として儒学に志向したとはみられない。直接の動機は別の点に求められねばならない。いずれにしろ彼の蔵書目録にも彼の著作にも儒学を本格的に学んだ形跡はないのであるから、この入門は彼が村落の支配者として藩の儒官「殿様御支配の御儒者」の門人録に名前を連ねることによつて自から権威を裝飾して、幕藩体制の末端的立場の強化を図つたのにすぎなかつたものと考えられる。

さらに寛政元年三月四十二才の時彼は本居宣長に入門している。⁽⁶⁾この年の三月二十一日に宣長は門人横井千秋(尾張藩士

一千石余の上級武士)等の招請で名古屋に入り六夜滞在したが、この時尾張における入門者は二十二人で、従来七人にすぎなかつたのであるから、この年国学が尾張平野に強力な地盤を張つたのである。神習会文庫の「鈴屋校業門人姓名録」(宣長白筆本)によると磯足は三月二十九日に入門したことになっているが、宣長は二十七日に名古屋をたち二十八日四日市泊、二十九日勢州白子の一見元常宅に泊つているから、磯足入門の日附が正しいとすれば、彼は宣長のあとを追いつ勢州白子で師弟の誓詞を取かわしたことになる。磯足は同門(田中道磨門)の植松有信・鈴木真実等の入門の報を聞き、おくれればせに同門の後を追つて入門したものとみられる。もしそうだとすれば、彼は国学に対する自らの学問の主体性を持たず国学を媒介とする社交の場に安易につらなつていたにすぎなかつたものかとも考えられる。

その外、年代はわからないが、天明から寛政にかけて彼は俳諧や連歌をしきりにやつている。特に俳諧では久村晩吉の跡をつぎ登雨菴二世を継承した名古屋の俳人松田臥央(彼も寛政四年鈴屋門に入つている)と往來して彼から俳諧を学んでいるし、花道にもまた精進したことが遺された文書類から推測されるのである。

こうした多様性は郷村文化の持つ特性であつたであらうが、一面に本陣の主人すなわち、村落支配者としての文化的裝飾、權威の偽装を示すものではなかつたか。

このようなことは彼の著書の性格を検討してみても納得され

るところである。著書として残っているのは「磯のより藻」(12)「歌集」・「時雨の日記」(13)「享和元年宣長歿時、山室山墓参の記」・「(14)のぶくさ」文化三年出中道磨を追憶する記(前述)・「河乃辺翁物語」(里人談)・「三子伝」(15)四人の村人について語つたもの(16)の外、刊行されたものの中で彼の序文があるものは、美濃の大矢重門の「美濃の家ずと」(寛政三年)・磯村道彦の歌集「春風集」の二冊である。彼の著書として刊行されたものは「校異土佐日記」一冊である。この著書は、磯足歿後「妻子おしへ子など」の請により市岡猛彦の手によつて文政元年十一月私版として出されたものである。

以上の著書が遺されているのにすぎない。しかも「磯のより藻」(安永三年から文化二年に至る作歌集)の外は、片々たる小冊子で、これらの著書から彼の思想を叙述するには余りに貧弱である。たとえば「三子伝」は近在の絵・碁に秀でた人や、孝子節婦の話で著書としてあげるほどの内容を持つていないし、「河乃辺翁物語」は門人渡辺為寧の序文によると文化二年磯足五十九才の著述で、刊行を予定していたところ中止となつたものである。内容は全十七話からなる説話集であるが、市橋鐸氏も指摘していられるように「今昔物語」の模倣で話題も二番煎じが多く、趣味趣好の域を脱していない。「校異土佐日記」はその中でやや業績として評価できるもので、磯足の序文によると「季吟翁の抄と、野道生の附註といふものと、素本」の二本をもつて校合した土佐日記に頭註したものである。当時「土佐日記」の教科書として普及したらしく、明治初年まで四回刊行

された。(13) だからこの著は定本の作成という意味での業績といえる。

以上磯足の学統と著作にふれてきたが、要するに彼の学問は小手先の学問であり、趣味趣好的要素から脱した学問でもなく、学問への一貫的な研究態度を看取することはできない。

しかし、前述の「鈴屋授業門人録」によると、門人名の頭に「古学」堪能成者之程度」により三重丸、二重丸、一重丸、三角印と印を附さないものの五段階に本店宣長自ら符号を記している。それによると門人は四十二ヶ国四九〇人中、三重丸二十二人、二重丸三十七人、一重丸六十九人、三角七十人、無印二百九十二人となり、磯足はこのうち最高の三重丸の中に入っている。

また寛政五年十一月九日附の宣長から千家清主宛の書簡中に「門人姓名記シ上候様に被仰聞候へ共、殊之外数多候ニ付、妾には得記シ不申、格別出精厚志ノ分、少々相認上ゲ申候」として、宣長は「出精厚志」の門人三十二名(内尾張十名)を列記している中に磯足も加えられている。この二つの例からみると、ただ、宣長に対して経済的援助とか雑用を援助したという意味で、宣長がここに記しただけではなく、少くとも四九〇人中の二二人目には入るだけの「古学」堪能であつたと解してよいように思われる。だとするならば鈴屋門の四九二名・大平門の一千余名・内遠門の七百余名・篤風門の六百余名という多数の国学者、あるいは支持者たちの学問・思想の内容は、その大部分の者が加藤磯足よりはるかに低く、その学問的に低い門人

層が圧倒的多数であつたと考えてよいであらう。それにも拘らずこのように多くの門人を擁し得たのは何であつたか。

後章に述べるようにこの門人の大部分は国学研究そのものよりも、それを通して封建制の總体的矛盾を敏感に感じうる立場にあつた村落の支配者、地方知行の武士や地方役所の役人たちのの中に、政治的実践の課題解決の要請のために、国学摂取を志向したからであらう。だから門人層の中には農民出身者や神官、さらには武士の門人でも、地方政治担当者たちが数多く見出され、治農政治を通して農民に直接よびかけ、あるいは農民に対して指導的立場にたつ者たちが多かつたのである。(19) 伊東多三郎氏のいわれる村落共同体の「家父長的性格」(20)をもつ者たちを捉えたのである。

加藤磯足は本陣職として起村最高の家格にたち、直接農民に接し、封建制の諸矛盾を何らかの形で解決せざる得ない実践的立場にたつていたのである。加藤磯足がどのような村落内の動向の中から国学に解決の方向を見出したか、彼の政治的実践がどのようなものであつたか、草莽の国学者とよぶにふさわしい加藤磯足の中に国学の農村的基盤を追及していこうと思う。

(1) 不肖僥倖記、加藤文書。

(2) 諸事留留、加藤文書。

(3) 磯足自筆の系譜には生年を延享四年十一月十五日としているが、磯足の母の生家、同宿脇本陣林家の日記には「延享五年辰正月廿三日午ノ刻おてる(磯足母)平産仕候

男子つちのへ申日」とあり、この記載の方が記録の性質からいっても正しいようである。何かの關係で生年月日の日取を変えたようである。

(4) 本居清造編「本居宣長稿本全集第一輯」七五六頁に全文が掲載されている。

(5) 名古屋市史人物篇第二、一〇五頁。

(6) 不肖僥倖記、前掲。

(7・8) 天明二年「細井甚三郎様講談一件」磯足自筆、拙蔵。

(9・11) 本居全集養所収「鈴屋門人録」以下同全集を「全集」と略す。

(10) 稿本全集第一輯八九一頁。

(12) 大垣図書館蔵本と、市橋鐸氏蔵本と三村竹清氏写本の「磯足歌集」と表題する三種が一括されて完本となるものようである。安永三年から文化二年にいたる和歌、長歌を収めている。市橋氏前掲稿による。

(13) 原本未詳、「稿本全集第一」九八九頁に収録されている。

(14) 刈谷図書館蔵、文久二年神墨梅雪(尾張藩士・儒者)の写本にかかわる。

(15) 加藤陸雄蔵(磯足の後裔)。

(16) 同書市岡猛彦の序文。

(17) 文政元年に私家版が出された後、奥附を変えて須原屋から明治初年に受けついで出され、さらに松屋善兵衛から栗田東平と四人の出版者によつて出されたが、松屋と栗田

は同版である。野村八良氏は同氏著「国学研究史」九五七頁で詳細な内容検討を試みていられる。

(18) 奥山宇七氏編「本居宣長翁書簡集」一四六頁。稿本全集二一六七頁。

(19) 伊東多三郎氏「国学の史的考察」(大同山書店)三二五頁。

(20) 伊東多三郎氏「幕末国学の一方」(神道研究三)三。

三 農民斗争の動向

草莽の国学者加藤磯足を指導者とする村政改革の運動は安永の末年から開始される。そしてこの村政改革の運動は、共同体の階級斗争の展開に対応し、下から突き上げられて起つた運動であつた。こうした農民動向を背景として、村方指導者¹⁾村方地主たちが村落の本百姓制の秩序を、村政改革運動を通して確立しようと図つたのである。この運動の指導層は村落支配者層の中に国学者が、現実的基礎を確立したのである。だから、ここでは国学を支え、また草莽の国学を生み落した農民闘争の動向を、一瞥つしておかなければならない。

1 享保期の農民動向

起村の惣百姓(別の史料を照合すると、これは高持百姓・無高百姓を含めた総百姓である)が寛文六年に集会を開き、一部の高掛りの課役を家並役に転化することを定めている。同時に小百姓の抵抗が予想されるが、この頃の史料には具体的な抵抗を推測させる何物も見出しえない。しかし、享保三年になる

と、家並役銭の拒否闘争はかなり明瞭になつてくる。⁽²⁾この村の支配者層の一人脇本陣家の万覚帳に享保三年十二月六日夜「長八方にて埒明ケ、小百姓無高寄合被申候」と記し、さらにこの寄合に参加した十人の名前を脇本陣主が書留めていることからみても、村落支配者層がこの会合の動静に敏感な反応を示していたことがわかる。この会合の結果として享保三年の暮には約三十人と思われる百姓たちが「一党」して家並役銭の上納を拒否する一方、藩役所へ「家並掛」課役銭の不当を訴えたが、藩役所は小百姓たち「願之趣」を逆に押さえつけていれなかつた。

この三十人の闘争がこの享保三年の暮にはどうなつたかについては何の史料も残されていないが、翌享保四年の暮、家並役銭の上納期になつて、今度は十四人の百姓が課徴を拒否したので、庄屋は、再び藩役所に、小百姓之内、右之役銭十四人出不申候者御座候、尤村方二而も段々申渡し候へ共、右之者共斗出不申候間、被仰付可被下候、則別紙、名書仕差上ケ申候通ニ御座候」とあつて、頭百姓による切崩しが行われたが、なお、十四人の百姓がこれに応じなかつたので藩権力の介入によつて事の解決を図ろうとしたのである。このため十四人の者に藩は「きびしく」上納を申しつけた結果、十四人中七人が上納し、残りの七人はこれにも応じなかつたので、遂に享保五年三月十二日に七人は一斉に召捕られて廿八日まで牢舎の上、郡外追放処分となり、家居は没収の上「諸式より私」となつたのである。ところが、その年の暮、藩から庄屋に対し「小百姓願之趣、

一先ッ敵敷申付候へ共、余り強ク願候儀ニ候趣」であるから、庄屋、頭百姓ともで熟談し、その後は「少々高へも掛り候様」にした方が「可然哉」と内々御達しがあつたので、藩の内達に従つて下層農の要求をいれたのである。だから結果的には下層農の勝利に終つたのである。

さて、この闘争の中でみられるように、頭百姓たちは自らの力で下層農の要求を抑えることができず藩権力を媒介して断圧を加え頭百姓の利益を擁護したが、結果的には敗北し、下層農の要求を入れざるを得ない立場にたされたのである。この闘争を契機としてその後農民闘争の型態が、従来の頭百姓⁽³⁾政治的支配層への闘争から個々の頭百姓に対する各個、個別的切崩し闘争に転化したことが看取される。こうした個別的闘争に転化したのは全般的な階層分化の進展に照応する頭百姓の動搖⁽⁴⁾危機意識を示す結果であらうと推測される。

例えば享保五年六月、本陣加藤家と有力な頭百姓脇本陣の林家とは理由はわからないが五十五日間「義絶」しており、また、正徳四年から享保五年にいたる七年間に、脇本陣兼船庄屋家の「あとしき」を相続した者三人が、いずれも終身不能、借金を残して夜逃げしている。そして享保六年七月二日は、さきの事件に小百姓たちの会合所となつた長八を先頭とする二人が中心となつて「人数を加へて」(徒党して)この村の新田に関する頭百姓八人の不正を藩役所に越訴したのである。その結果、越訴の者のうち二人は「村方御預ケ」七日後に赦免となり、村役人と頭百姓八人は「しかりこめ之よし被仰付候」とあつて、不正の摘

発に成功している。

また享保九年には起川(木曾川)渡場の船方肝煎役(起村舟庄屋の支配下)で方荷物運漕をしていたと推測される文右衛門の横暴と不正を船仲間六人の者が、藩に訴えて文右衛門の役儀取上げに成功しているのである。⁽⁵⁾

このような個別的な闘争の中で容易に要求が貫徹しているのは、藩権力の弱体ではなく、藩が村役人・頭百姓に問題を転化して藩権力に対する闘争を回避した結果のように思われる。だから闘争の対象が常に村内に向けられ、藩権力を直接の闘争対象とするまでに発展しなかつたのである。しかし、藩が村役人層に問題を転化した結果は、共同体の秩序は本百姓制の秩序は動搖せざるを得なくなつた。

2 元文―天明期の農民動向

下層農の下からの抵抗による頭百姓層の分裂。すなわち小百姓を自己の味方に抱きこむことによつて、頭百姓が自からの村落政治支配権を掌握することに狂奔する「村方出入」が、この国学展開の前段階で頻発して、この時期における農民闘争を特長づけている。

その一例をあげてみよう。元文四年に本陣兼間屋加藤右衛門七(磯足の祖父)は「船持 党」(木曾川起渡船場の船持)と「工み」、脇本陣兼船庄屋林浅右衛門の私曲を訴えたため、浅右衛門は八十八日間、船庄屋役を取上げられることになつた。

この事件を契機として従来船庄屋役は一人役で家付の役儀であつたが、新しく頭百姓水谷七左衛門との二人役と定められ

たのである。⁽⁸⁾この村を代表する頭百姓である本陣家と脇本陣家が争い、さらに林浅右衛門（脇本陣）と水谷七左衛門（新船庄屋）との間に、船庄屋役を一人占めして徳分の独占を図るために、互に彼等は「船持、船人を取込み候而、工ミを企て」と相手を中傷しつつ、その後文化年間にいたる七〇余年間にわたる争が続いたのである。彼等は下層農を抱きこむことによって村政上の地位を固めることに狂奔したのである。

尾張藩権力が、村落支配層を強力にバックアップしていなかったために、村方上層が農民下層の抵抗の中で動搖し、下層と一味することによって支配権を維持する方向に向つたのである。だから、農民下層が、藩権力と村上層との間隙に乗じて個別的な打崩しを容易に貫徹させたのである。このため、「已来、村方之風儀取乱」⁽⁹⁾して共同体的秩序が混乱するに至つた。

この時期に尾張藩は天明改革を断行して「風儀取乱」した農村の一新を図り、藩権力をもつて村落共同体の支配者を強力にバックアップする政策を打出したのである。この天明改革前後から加藤右衛門七磯足の村政活動が開始されるのである。⁽¹⁰⁾

- (1) 寛文六年「村中相談仕諸事相定佐法之覚」（加藤文書）
- (2) 「諸願書」（加藤文書・「諸事留書」（加藤文書）・亨保五年「脇本陣日記」（林文書）による。

- (3) こうした貢租の不公平による農民闘争は宝暦二年に尾張葉栗郡里小牧村でもおきていた。即「当村、有力之高持百姓御年貢諸御役銀等相勤メ申候得共、小百姓賄成不申候

屋制的仲買的な郷商人は、前賃を通して小百姓以下の農民下層の直接生産者を組織していくのである。⁽¹⁾

このような在郷商人の成長は、階層分化を促進させつつ、一方に旧来の本百姓の系譜につらなる村方地主層を没落の方向へ決定的に追いこんだのである。即ち綿織業の展開は在郷商人を頂点とする新しい生産関係の成長と本百姓制の共同体的秩序の危機と動搖を通して、一部の頭百姓の急激な没落という現象をよび起した。こうした幕藩体制の下部組織の動搖は、藩政展開上の桎梏となつて、尾張藩はここに天明改革を断行するにいたつたのである。

1 天明改革

起宿本陣加藤磯足は、この時期に藩の天明改革と呼応し、村内の頭百姓層の先頭にたつて村方風儀改革運動を推進したのである。国学者加藤磯足の実践的課題が、どのような現実的機能と役割を持つものであつたか、まず天明改革とよばれる一連の政策のうち、本論展開に重要な意義を持つ部分を照らし出して検討を試みよう。

改革は人見弥右衛門磯邑・津金文左衛門胤臣・樋口又兵衛好古の尾張藩最初の地方巧者の登用をもつて、藩主宗睦の天明元年を起点として開始される。尾張藩政史の表面に始めて地方巧者が表われたのである。このことは地方巧者の登場を要請せざるを得ない地方の「風儀悪敷姿」(内達)が、藩政展開の桎梏となつたことの現実的要求でもあつたことは上述からも理解できるであらう。

而、御年貢等上納仕難ク、御未進多ク在之候、是ハ御年貢諸御役銀高掛ニ而御座候故、有力之高持百姓ハ輕ク相見ヘ申候得共、小百姓ニ而ハ、別而重ク相成候而、如斯相成申候哉」岡本幸雄氏「徳川中期における尾張一農村の考察」(立命館経済学四の五)。

- (5) 「船方御用留」・「脇本陣日記」(林文書)。
- (6・7) 「船方御用留」(林文書)。
- (8) 船庄屋とはこの場合起宿の本曾川渡船場を管掌する者で、脇本陣の家付の職掌であつた。

- (9) 加藤磯足が諸書で使っている言葉である。

- (10) 本稿の直接の課題と関連しないので本文ではふれなかつたが、天保期以前に寄生地主体制前の農民闘争の特長として村方出入、村役人リコール運動の激発があげられる。こうした闘争が天保以後、地主制の体制的確立以後、集団的な訴訟出入は全く姿を消し、替つて単独の訴訟・越訴という型態をとるようになっていく。こうして農民闘争の闘争型態の変化は地主制の成長と一体化している。

四 村政改革運動

加藤磯足が村政改革に着手し始める明和——天明期は、この地方への綿業の移入・定着にともない、近江・加賀・越前の商人が入込み、商品生産の一層の発展をみせた時期である。この遠隔地商人と結託した在地の商人が生産者利潤を収奪しつつ商業資本を蓄積し、やがて彼等は地主化していく。地主化した問

さらに、たとえば尾張藩士竹中和順は

御代官、司る所之地理、民之正偽ニ不委、無余儀取扱候手代ニ因而事を謀り候より、司農之政、多は手代コリ出申候。(安永三年)

と指摘して、代官が農村の実情に暗く、勢い手代に司政をゆだねるも、その手代、また

下細民疾苦を不顧、偏ニ賄賂を待て、其事を謀申候。(安永三年)

とある出先下級官僚の腐敗は、そのまま出先官僚と村役人層の馴合による下層農への犠牲のしわよせを暗示している。だから竹中和順は

識者之申候通、返々も御代官、各司る所江村居仕候にしくなき様奉存候。(安永二年)

として従来、尾張藩の地方司政は城下名古屋に因奉行所をおき、手代を事に応じて村々へ出張させていた制度を廃し、代官の在地駐在制を具申したのである。この在地駐在制が、天明改革で実現をみたのである。潮のような商品生産の高まりを藩権力が、自から地方行政を改革して、農民の実情の中からその成果を直接につみとろうとしたのである。

直接につみとることによって、腐敗官僚の賄賂の代償としての下免を根絶して貢租の加増を図り、合せて腐敗官僚と馴合の農民上層の一新を図ろうとしたのである。このことについて加藤磯足はこう述べている。

中古以来地方御役人衆専ら賄賂に御耽り、私曲姦邪の御取

扱而已ニ而賞罰不正御收納筋も追々相減、乍恐御勝手御不如意ニ被為成候由、且世間一統トハ申在々御百姓耆長シ農事を怠り博奕等之悪業、追而趣意仕候ニ付四、五年以前ヨリ御切替被仰出候共、弥々行届兼候処、去秋(天明五年)類ニ倭曲之御役人方を御退ケ被遊、御代官方不残所附被仰付誠ニ御仁意も可被為行届趣ニ而、千万有難御事ニ奉存候、然処、右之通御役人方之私曲ヨリ一統下免ニ相成、御收納薄く相成候ニ付御切替ニ付而ハ、以前之御免相無御引戻被遊候思召哉と奉恐察候、此儀御尤至極ニハ可有御座候得ハ賄賂被相行候ヨリ下免ニ相成りと申儀斗ニ而も無御座、凡三、四拾年来、追年風儀乱れ、御百姓怠惰ニ相成無益之奢ニハ金銭を賞シ障をも盜、糞、耕作ニハ力を用い不申、其上、往古ニ引競候而ハ、干鰯、粕等、以之外高直ニ相成候ニ付、段々と諸立毛出来劣り、大小之御百姓、内力甚相弱居申候得ハ、此儘ニ而急御免相進申候様こと被遊ては中々行届申間敷候。(天明四年内達・内達については第五章に述べる)

ここで彼が指摘していることは、役人の不正だけで下免となつたのではなく、延享・寛延以来の商品生産の全般的な滲透による農家経営の貧弱が、その原因であることである。さきの藩士竹中和順が役人の不正だけを一面的に指摘しているのに対し、彼はあくまで農民の側からみた実情を正確に把握している。

さらに磯足はこの改革に対し、代官駐在制をとり、不正役人を一掃して免相を高めること増徴することは、農民の側からは

「厚歛」(内達) のための改革と感じ、かえつて収賄役人は農民側からは良吏とみなされ、廉直役人は「下々をこらしめる役人」(内達) と心得るのは「下賤愚昧之者一統之習」(内達) である。だから仁政を基とする立場からの改革も農民側からは「兎角厚歛ヲ第一被遊候」(内達) ことか、あるいはこの改革を農民は「御利用の為に御世話御座候様ニ而存取、都而民心ニ悖り兎角御切替安心不仕候様子ニ相聞候」(内達) と感じていると述べている。だから藩の農業奨励政策・倭約政策から「村入用減候様等」(内達) も「厚歛之為之御世話と而已有候事」(内達) としかみられなかった。

こうして被治者と治者の基本的な矛盾を磯足は指摘して「上下、遙ニ隔意ニ相成候」(内達) と述べている。この磯足の批判からも、被治者としての農民が改革即増徴と把握していること、あるいは「仁政」を押しつけながらの収奪の強化という偽装された仁政の本質を農民が見破っていることなど、被治者の高い政治意識・政治感覚を窺ふことができるであろう。

磯足は本陣問屋として居村の農民から助郷の農民にいたる広汎な農民に接し、その動向について宿政の担当者としての立場からの村政の改革運動、共同体の強化という運動を、治者と被治者との矛盾相剋の中から打出してくるのである。しかも彼は天明改革を背景とし、これに乗つて村政改革に乗りだしたのである。

要するに天明改革は代官駐在制を採用して、収奪の強化を商品性産の展開に対応するものとして断行されたのである(明和・

天明期に、この地方に綿木綿生産が移入定着し急速な発展をみた)。この遂行に際し、藩校の充実・細井平州の登用(後述)・孝子、節婦善行者、老年者の藩による表彰政策等、仁政教化撫育政策を表面に押出すことによつて露骨な収奪政策を隠蔽しながら押し進めたのである。

ついで、天明改革を推進した政治家たちを検討することによつて、この改革のもう一つの面にもここでふれておきたい。

天明改革の前夜、頭百姓層の動揺、村役人層をも含めた治者の封建制危機の意識の段階で、国学が急速に尾張平野に滲透を開始し始めたのである。この段階で登用された地方巧者三人のうち、樋口好古は郡村徇行記・税賦参定指南・牧民忠告解等の地方司政の書を著わし、農村の実情の正確な把握と、その調査の上に立つての司農政策展開という関心を示した尾張藩における最初の本格的な農政家であり、寛政四年には石原正明・鈴木朗等と同年に「鈴屋門人録」に「尾張名児屋 御家中樋口又兵衛 好古」として記入された一人であつたのである。⁽⁵⁾

人見義昌は儒学者であり、細井平州の尾張藩招請(天明元年)に一役を演じた経世要録・康済録解等を著した人物である。寛政四年三月九日、彼は名古屋で宣長と会つて学問上の問答をかわし、一時「皇朝学に志厚く候のもよう」であつたが、後には宣長学を「御政の害」をなすものとして入れなかつた。

要するにこの二人のうち、樋口は入門し、宣長学の主権主義的人間観、ありのままの姿で農民を理解しようとしたのに対し、人見は、一応これに同調しようとしたのであるが、徹底した愚

民観は、農民心情の内面の深さにまで立いたることができず、これを無視した儒教的規範主義から脱却することができなかった。この両者の相違は共に農民の下からの力に対応してあらわれた良心の共鳴の仕方の相違であつたと考えられよう。

こうした地方巧者二人の学問の相違は、そのまま天明改革の姿を暗示している。即ち、一応、農民動向を見定めつつも、封建的規範で表面を装飾したにすぎなかつたのである。

今まで述べてきたことを含めて国学の政治思想への反応が、農村の階層的動揺の中から生まれ、下から突きあげられた頭百姓層以上のなかに受けとめられた。それは「始終は武威ばかりにて押へがたし、此方よりきびしくあしらは以後又かの方よりもいよいよきびしくかれと教うるやうの道理なれば也」と宣長が「秘本玉くしげ」の中で述べているような、強圧的な司政では、圧えることのできないうちに成長した農民の力と、依然として愚民観から脱けだせない政治の貧困を、もつとも現実的な共感をもつて応えうる郷村の指導者・地方為政者の中に、さまざまな形で滲透したのである。加藤磯足の村政改革運動は、こうした藩政の貧困、治者と被治者との対立する矛盾の克服として開始されるのである。

2 民恵錢運動

草莽の國学者加藤磯足を中心とする起宿の頭百姓たちによる改革運動は、安永年間から開始される。まず民恵錢運動から具体的な検討を試みたい。

安永八年十一月、この村の十人の頭百姓たちが、宿内に「摺

万貫、盜賊体之者」を泊めたり、出生地の「不慥成者」を居住させていたという理由で二十四人の者が処罰されたことの責任者として國奉行所から各々「叱込」・「叱」の申付があつた。

この事件を直接の契機として村内風儀改革の運動がおきたのである。さきに述べた如く農民闘争の激化にともなう本百姓制的共同体秩序の困乱と、農民窮乏の累積的な結果として、このような事柄が起きたのである。

だからこの事件の翌安永九年四月、十二人の村役人・御役人が二十七ヶ条の村法を制定し、農民に厳格な実践を上から促したのである。促がさなくてはならなくなつた理由を磯足はこう述べている。

村中一統之及難儀候儀ニ而既ニ追々身上滅却いたし候者も有之、甚以歎ケ敷事共ニ候、且又当村之儀數年之仕辭ニ而御年貢諸上納取立方を始め、諸事庄屋前取扱方忽ニ付、部而村中之心得おのつから墮弱ニ相成、未進等も年々と大分ニ相釐り、其上格別ニ著リ相増し一統に嚴敷令國窮、此為体ニては上中下共取統無寛束次第第二候。(内達)

ここでみられるのは藩政への忠順な追従である。こうした追従は彼自身をも含めた村落上層の下層農民の抵抗に対する防衛でもあつたのである。例えば、天明二年飢饉時にもかかわらず藩から定免をもつて上納を申つけられた時、村の中ではこれに「憤り候心底より、人氣かだましく相成事を其敷構へなし、騒動ニ及セ不申候而ハ格別之御用捨も有御座間敷と相企」(内達)ている村方があることを指摘して代官に警告を発している。こ

うした警告は彼自身、下層農民の抵抗に自らも恐怖して、藩権力を媒介して压えようとした姿であつたのである。こうした立場から定められた村法の内容は五人組帳前書式の規範から出ているものではない。だからその農民への効果についても多くを期待しえないのは当然といふよう。事実、翌天明元年十一月磯足は「格別ニ村法相定申候得共、兎角、數年墮弱之仕癖、且一統氣質愚敷、邪を是と心得、正を非と存取、東西之方角をも取違居申候為体ニ御座候」と述べている。

つまり、道德規制の一方的布達だけでは、それは今までの治者の行なつてきたことではあるが、解決できないことを指摘しているのである。だから彼は村政改革を効果的に実現するためには「患を先と仕」らなくては「法式ヲ定メ制止候共、所詮、実意ニ相用申間敷候」として、「実意」＝「患」(まごころ)をもつて当るという次の第二の改革政策を打出したのである。

それは第一に頭百姓十五人が醸金して村民の未進金を一掃すること、第二に頭百姓が分限に応じて金銭を貯蓄してその中から慈悲金を施すことであつた。

天明元年九月、磯足は庄屋加納半左衛門と未進金一掃の醸金と民恵錢施行の具体案をまとめあげ、これを実践するために藩の地方役所に対して五ヶ年間の御用達金免除方を願出た。地方役所の代官は、この案を一見して、「扱々寄附千萬成存立、御上之思召我等が存念にも相叶い儀共」と称美し、感心の余り代官自身も口米のうちから自分金を以つて五ヶ年間醸金すること申出、兩人へは酒肴のもてなしをした上、後日、感状式の文書を

と所屋に出している。それによると「其宿々追々及困窮、就中小百姓之内ニ者人品も心得違候者も有之」よつて民恵金を募金したことは「類少警之趣、容易ニ者音聞敷候、此趣宿へ令磯足吹意馳、猶更深切之行届可取扱候、下々民ニ思召遣し、邪曲之者、是を憎ます是を不去、共ニ患を以善心ニ導候段至而神明、我支配々様ニ德実生すれハ外村へも響、我徳分ならずして、共に正直之光をかかくるに同し」とあり、その後この御札に頭百姓四人、年貢未進方惣代二人合せて六人が名古屋國奉行所に書いた宛「寒き候ニ付」葉粥を馳走されたこと記している。

さてここで指摘しておきたいことは磯足金銭の民恵錢一件は、「御上之意」に叶つたことであり、代官は支配下百姓の奇特な行為はそのまま自分の功績として上長に報告している。國学者加藤磯足の村政改革は頭百姓を協力者とし、小百姓以下の民心不隠を統制し、帰服させることによつて善心に立かえらせる点にあり、このことはまた代官が「我意ニ叶い」といつているごとく天明改革の指向と一体化していたのである。だから、この場合に関する限りでは、國学者の果した政治的役割の限界はかなり明確である。貢納に即ち上を敬うことであり、敬をうるためには慈悲を施さねばならぬ、こうして下民を善心に立歸らせて、身分的封建的秩序の貫徹を期するという治者の論理に忠実に立つているのである。

こうして十六人の頭百姓は未進金と民恵金の月集積立を天明元年十月から開始し、約八十人と推定される未進の村民の借金、総額を頭百姓十六人の出金で六十七人の貸主の利子控のも

とに七十六兩一分ト八百九十文をもつて未進金を解決し、一応村民の未進借用者を零とした。さらに頭百姓十六人の月集積で「孤独の貧者」救方に当て、天明元年十月に十二人の貧者に二貫から二〇〇文の救金合計十三貫五〇〇文を支給、十二月にも二十人の「貧窮者」や「心底相改、請作或ハ奮振商ひニてもいたし候様段々教訓申間候上、高い元手として」二貫乃至五貫ずつ、また、五十五人の「老衰之親或ハ舅姑等御座候者共ニ御座候ニ付随分太切ニ介抱いたし候様教訓申間、老人養ひ勵之ため助力として」二〇〇文ずつ合計七十二人に支給した。天明二年には同じく三十四人に支給したのである。この民生運動の過程で一方において、代官所は孝子節婦を庄屋から報告せしめ、表彰しているが、この時、庄屋報告の孝子節婦は近郷三ヶ村を合せて七人であるが、その内三人は頭百姓家で磯足の母、九八郎の妻、七左衛門の弟であるから、頭百姓家が模範的であることを書立てることによつて村落支配者の權威を意識的に高めようとしたことが推測される。

また一方「風儀」改革のため、博奕の定宿となつてゐる明き家二軒の破壊、他村より借家住て入つてゐる者で「悪業ニ携ハリ候者共」の引払七人また悪業の者を寄せつけてゐる者八軒に「堅寄セ付申間敷事」を申渡している。

こうした一連の行動は磯足を中心とする庄屋、頭百姓の強力な支持と團結を必要とするし、また、團結せざる得ない下からの抵抗の所産であつた。それがたとえ藩政を背景としていたにしても、代官が「類少」の行為と称賛した実践性は高く評価してよ

いであらう。また、被治者、農民の実情の中から生みだした民権運動であつただけに、藩政にみられない封建制矛盾の一端をついたものであつたと考えられる。しかし、あくまでも、封建制の強化の枠外に出るものとは思われないから自ら運動そのものの限界があつたのである。

(1) 前掲拙稿「匿研三一九」、拙稿「近世末期における尾西綿織物業の展開過程」(社会経済史学二二の五・六)

(2・3) 「難波之塵」名古屋図書館蔵。

(4) 国奉行所の下に、最初三代官をおいたが漸次行政地域を細分して十代官とし、いずれも所付とした。

(5) 「本居全集」首巻一六頁。なお樋口・人見については名古屋市史人物編、政治編による。

(6) 奥山宇七編「本居宣長翁書簡集」一二〇頁寛政四年一月廿八日附宣長より横井十郎左衛門(千秋)宛書簡にみられる。また磯邑と宣長との問答の内容は「磯避問答」によつて知られる。人見の政治論としては「人見彌右衛門上書」(日本経済大典二六所収)がある。彼の見識から天明改革の一端を理解しえられる。

(7) 横井千秋が、宣長の「古事記伝」を藩主に献じようとしたが、磯邑はこの書の「主意を御厚信御座候而は大に御政の害になり申候」として反対したことがある。磯邑は前述の宣長との対面で「検使の位置にあるがごとき態度」(名古屋市史学芸編五一頁)であつたし、同市史(五〇頁)によると、その頃の落首に「とれぬもの」として「人見の機嫌」というの

は、国学の場合と同様であつたといえよう。

国学を学んだ加藤磯足が、学問の展開の方法を全く異にする平州に入門したという事実は、さきに(二章)指摘したように彼が学問のための学問を求めたのではなく、宿願の本陣主として郷村政治の解決のための理念を求めたことにあるのである。だからこそ国学と折衷派儒学が彼の精神の中に共存しえたのである。

さて加藤磯足発企の平州「講談」会の状況を述べ、その政治的意義と結果を検討してみることになしたい。

平州講談会は磯足のほか、起村庄屋加納半左衛門、同郡山崎村の庄屋治右衛門の三人を中心として天明二年正月十八日十九日の兩日、起村で四回、廿日には山崎村で一回、合せて五回にわたつて催されたのである。磯足はそれを次のように記録している。(一)内筆者

1 (起村第一回於庄屋宅、午後四時より)

十八日七ツ時より

一、半左衛門方ニ而御講釈、初座孝経、後座論語、拝聞之者凡千七八百人程有之候。席帳門前に而つけ申候。赤飯、糯米五斗、小豆三斗ニ而不足いたし候。

2 (起村第二回於本陣磯足宅、夜より)

同夜

一、右衛門七方ニ而御講談論語・大学拝聞之者凡式千人程也。夜分ハ赤飯なし。

3 (起村第三回於本陣磯足宅、午前十時より)

をあげているところからみて儒教的理論、非人間的規範主義に徹した人物であつたことが推測される。それだけに宣長の主情主義的感性的なものに反撥していたものと解されるが、宣長との書簡の中ではそうした点は発見できない。

(8) 「増補本居宣長全集」第六、三六頁

(9) 以下、2節は「村方ベリ一件」・「古末進金片付孤獨之貧者救方村ベリ一件」・「自集金を以貧家救方其外取斗方一件」いずれも表題年次天明元年による。

3 細井平州の教化講談

天明二年正月六日、この日加藤磯足は細井平州に入門し、その翌日平州の「講談」を聞き、その「講談」に感激した彼は平州を自村に招請して講演会を催すことを発企した。そして「何卒、起宿へも御越被下間敷哉と相願候」と彼が記していることからわかるように自らこの招請を行なつて教化政策に乗りだしたのである。

細井平州は中西淡淵に学び、後、米沢藩に再度招かれ、藩政に参画した折衷学派の儒者であるが、安永九年九月人見磯邑の推挙によつて尾張藩主宗睦の侍読となり、天明三年四月には藩校明倫館の督学となつた人物である⁽²⁾。そして彼の思想は「身分制秩序への絶対的服従なのであり、愚民は愚民であるがゆゑにこそ彼ら自身にとつても服従が至善至福の道」であつたのである。国学が下からの維持を図るものとすれば、平州の学は「上からの政治的実践における絶対的服従」を強制するものであり、封建的危機の段階に対応する性質のものであつた点

十九日四ツ時

一右衛門七方ニ而御講談孝経・論語拝聞之者凡四千七百八人程也。赤飯、糯米五石程、小豆九斗程。

4 (起村最終回於本陣磯足宅、夜より)

同夜

一右衛門七方ニ而御内講国語拝聞之者凡二千八人程、是ハ余り多人数寄り集り候故、潜ニ相催候得共、左之通参集いたし候。

5 (山崎村 於庄屋治右衛門宅、午前十時より)

廿日四ツ時

一山サキ治右衛門方ニ而御講談孝経・論語拝聞者凡五千人程、赤飯、糯米五石、小豆五石也。

この五回の講談で「凡ベ(延)一万五千五百人程」の聴衆が、「尾濃合百七十一ヶ村」から集つたと記している。まことに驚くべき参加者数であるが、この員数が全く虚構ともいえないことは、この講談を機として、天明二、三、四年にかけて尾張藩領の各地で、平州の巡廻講談が行われ、いずれも万余を集めていることからもうかがわれるであらう(第一表参照)。

さて、この驚くべき多数の聴衆を集めた講演会はどうな様子であつたかをみよう。

当時平州に随行した小河善太夫が某に宛てた書簡に⁽³⁾

おこし(起村)の方へ、四五日塾長と先生に随従致し拝聴仕り候。誠古今珍妙とやいはん、感心仕り候。なる程、人々感涙致候も有之筈の義にて御座候

1 平 州 巡 廻 講 演 (天明年間)

講 演 地	年 次	発 企 人	回数 () 日数	参 会 人 数
中島郡起宿	2 年 1 月	加 藤 磯 足	2 日 (4)	10,500人
中島郡山崎村	2 年 1 月	庄屋、治右衛門	1 日 (1)	5,000人
海東郡木田村	2 年 1 月	大 館 高 門	2 日	10,000人
岐阜	2 年 4 月	藩	3 日 (4)	42,966人
海東郡佐織村	3 年 5 月	藩	3 日	?
海東郡津島村	3 年 5 月	藩	3 日	18,000人
春日井郡鳥居松村	3 年 5 月	藩	3 日	10,000人
名古屋橘町	3 年 11 月	藩	1 日 (1)	2,400人
名古屋栄国寺町	3 年 11 月	藩	1 日 (1)	4,000人

高瀬氏著「細井平州」。後藤氏著「細井平州」等による。

とあり、また平州が岡山の湯浅明善（常山の子）に与えた書中
に、⁽⁶⁾
其日々の講釈とは申し候へ共、不説不書の愚民男女へ申
し聞け候事ニ候へば、実の所はむかしむかしのぢぢばばも
のがたり同様ニ相心得、彼等が耳に能く入り候様に、五倫
の五教を説き聞かせ申す事に御座候
と記している。この史料から、平州が「愚民」たちに、物語式
に平易に五倫五教の道を説き、平州自身また話術に巧みであつ
たことが知られる。⁽⁷⁾

そして、講筵に列した聴衆は「数千人拝伏仕り、珠数をかけ
おがみ申候」⁽⁸⁾とか「如来様如来様と云ひて錢を投げしと云ふ」⁽⁹⁾
とか、また「みな一字をも解せざる土民のみ多し、わづかに学
問の志ある者は百が一にもあらじ。然るに競集り、頭を傾け涙
を落す」⁽¹⁰⁾というような狂信と思われる程の反響をよびおこした
のである。彼は絶対服従の中で「患は無之事」と安心至福の道を
説いたことがこのような反響を起したのである。また、参会者
に赤飯・切飯・小豆粥などを供したことも多数の聴衆を動員し
えた原因であろうが、より根本的な点は、封建制の危機意識・
農村荒廢の現実が、極めて深く且広かつたことに対する反応を
示すものであろう。

起村での教化講談の成果に勢づけられた藩は、その後領内各
地で平州の巡廻講談を計画的に実施したのであるが（第一表参
照）、このうち農村側からの要請で行なつたのは海東郡木田村・
山崎村・起村の三例だけである。木田村の発企人大館高門とい

う人物は、磯足と同じ頃田中道麿に入門したいわゆる草莽の国
学者である。天明四年、磯足より四年早く高門（当時十九才）
は宣長門に入り、宣長は彼の家に屢々宿つてゐる。要するに発
企人の内の二人は共に草莽の国学者で、この講談会の最初の企
劃者であつた点からも、国学が草莽の中に地盤を拡大してきた
のが何であつたかを暗示していることに気づくであらう。と同
時に農民の国学者たちが、本百姓制の秩序の解体を村落上層の
立場から上から押さえつけようとしていたものであることが看
取されるのである。まさにそれは衣笠安喜氏が指摘しておられ
るように細井平州の「教化の世話」の思想が「勸農殖産と郷村
掌握政策の論理的基礎づけであつたとすれば、そこにおける
『安上利民の政』とは、君主権限の代行者であり改革の推進者
たるべき奉行代官層の為政の目標を示す」ものとして、村落の
治者たちの現実的課題の解決の目標として彼の講談会が発企さ
れたのである。

さてこの講談会を聞いて感激の余り、起村で十九人（第二表
参照・いづれも高持百姓）、さきの磯足と庄屋加納半左衛門を
含めて二十一人が平州に入門したのである。またその外「近在
にても医師、俗人共、凡廿三人」が入門したと記している。

以上、述べてきたことからでは表面的に一応の成功（上から
の施政の立場では）を収めたようにみられるが、果してそれで
あろうか。

講談会後の天明三年に磯足はこう述べている。すなわち善行
者・孝子・節婦らの表彰（褒賞品施与）や教化・儉約奨励・悪

業者戒告などの「難有御事をも、其身ニ不相応者共ハ、空事、
余所事之弊に聞なし御免相者一統ニ付候事故、奉恨候者共、多く
相聞」^(内達)と述べている。また彼は「平州先生御講釈とハ甚
相違いたし在之候」^(内達)として、平州の教化内容とは違つて貢
租が過重となり、これを恨む農民が藩政に対し「疾苦多し御仕
向と申立候」^(内達)と述べていることを指摘している。またこ
の頃の随筆に「西春日井郡瀬戸の深川神社神主の話として、近
頃孝子節婦がしきりと顕彰されるが、これは上司の意をむかえ
る俗吏のさかしらで褒美を与える程のものではない者が多い」
と記されている。⁽¹³⁾

このようなことから分るように、平州講談の内容が、絶対
服従を説く上からの規制であつただけに、一時的に農民闘争の
鋭先を鈍化させる阿片の役割しか持ちえなかつたのである。し
かし、藩政の上ではこの麻醉剤が効果的なものであつたこと
は、この後、しばらく、起村の中で、全く闘争の姿がみられな
いことから推測できるのである。

だから天明三年の全国的な飢饉・農民闘争の激化の中ですら
尾張藩領は「家をこわす程の騒動はなけれども、張紙せし所も
上有知（美濃武儀郡）辺にありつれ共、大切に有し」⁽¹⁴⁾と細野
要斎が述べているごくである。しかし点火の機会さえあれば
一揆発端の可能性が充分に胚胎していたのである。磯足はこれ
を次のようにいつている。

村方連も人氣甚不平ニ而、当暮（天明六年）、御勘定之様
子ニより見苦き騒動ニも可及申哉之きざし相舍居候様ニ相

聞申候(内達)。

こうした礎足の警告からも、農民動向の一端を理解されるであらう。

さて、以上に述べたように、平州講談会発企は一揆激発の可能性を含めた村方秩序の危機に対応して行われ、危機感の汎汎な滲透の中で、多数の聴衆を動員しえたのである。が礎足自身が既に語っているように、講談は平州の口先だけの教化で、藩政そのものは全く教化(仁政)と背理していたのである。当然のことであるが、平州儒学が上からの為政への服従主義であつたから、農民生活の中に定着する性質のものではなく、自らそこに、たとえ折衷派儒学が封建制の危機の中から生まれたものであるにしろ、危機の深化に対応しうる限界は明確であつたといえるのである。

だから、やがて礎足は細井平州の学問に絶望し、一時、入門はしたが、その後、この学問に精励した気配は全くみられない。そして寛政元年には田中道磨門から本居宣長門へと移り、国学への志だけは一貫して貫ぬいている。このことは国学が平州儒学と異つて、下からの農民の姿があるがままの形で捉えようとする発想であるがために、農民上層加藤礎足の現実的感覚の中で一体化して貫徹していたに外ならないのであつた。

- (1) 天明三年「細井甚三郎様御講談一件」(礎足自筆本) 拙蔵による。以下註記しない限り本節はこれによる。
- (2) 高瀬代次郎氏著「細井平州」(大正八年刊)。後藤三郎氏著「細井平州」(昭和十四年刊)による。

内各地で自普請が流行し、ことに天明三年尾張庄内川の氾濫に際し押切村(西春日井郡・現名古屋市)の庄屋大助と一東利助が町在を動員して行なつたいわゆる「御冥加普請」⁽³⁾は二月四日大野木村堤を鍬初として開始された。その日「町在とも緒々其所の印を付たる幟をたて、此日集る所の人数二千余人、自普請の事なれば町の者ハけやりをうたい、在の者ハ長持歌をうたい、川を凌らへ土砂を運び、数百の幟、風にひるがへり、其声遠村迄響き渡」⁽⁴⁾るありさまで、この工事に藩校の督学細井平州も門人と共に工を助け、藩主また巡視して酒肴をさずけたときとされている。大助と共にこの事業に当つた一東利助は、この事業の経過を「御冥加普請之記並図」と題して寛政年間に版行しているが、その末尾に国学者田中道磨の讃歌一首を附しているところから、この土木を発企した一東利助・大助は共に、国学になんらかの関心をいだいた者のように思われる。

このようにして村落支配者たちが、村方地主の没落期・階層分化の急速な深まりの中で、土木の工を起して、農間余業の機会を与え、⁽⁵⁾合せて「仁政」を農民に吹こみつつ、闘争意欲を鈍化させながら封建的身分的秩序の強化に一役を果したのである。

- (1) 残存の自普請史料は欠史料が多く、このため全様の把握が困難で、詳細な検討に基づく究明ができないが、礎足の事業中最大のものであつたことは、その後の彼の歌からも推測される。
- (2) 自普請を賞美して国奉行所より五ヶ村の庄屋・組頭に

- (3・4) 衣笠安喜氏「折衷学派の政治および学問思想」(日本史研究四〇号、四一号)。この論稿は平州にふれた最近の論考中最も優れたものの一つであると思つてゐる。

- (5・8・9) 前掲後藤氏著五八頁五九頁所引。

- (7) 高瀬氏篇「平州全集」(大正十年隆文館刊)九一三頁にこの講談の内容が「細井先生講談聞書」として掲載されている。

- (9) 前掲高瀬氏著四一八頁所引。

- (10) 「護花閣隨筆」上(名古屋図書館蔵)。

- (11) 本居宣長稿本全集第二。名古屋市史人物篇。なお、平州の地方講談を最初に発願したのは大館であつたが、実現の方は礎足の方が早かつた。

- (12) 衣笠氏前掲稿。

- (13) 市橋鐸氏より教示されたが、同氏が原典を失念されたので、筆者は原典を求めて多くの隨筆に当つたが未詳のためやむをえず同氏の記憶にしたがつた。原典判明次第補訂したいと思つてゐる。

- (14) 「涉獵雜抄」(名古屋市史政治篇一、五四九頁所収)。

4 自普請発企

加藤礎足による最後の村政改革運動は天明二年九月に開始され、断続的であるが天明四年の秋頃に完了したと推定される木曾川堤防の修築事業である。この事業は起・富田・西五城・東五城・小信中島村を中心とし、およそ近郷五十余ヶ村を動員して民費によつて行われたのである。この後これを発端として領

書付が渡された。その中で「其方共申自普請之儀、発端数百間之堤腹重出来之儀、大成手柄候、其上其方とも発端より所々自普請と申事起り、追々普請も出来全其方共村々之本平ニ相成候段へ、各別之御奉公と可申候」とあることによつて知られる。

- (3・4) 名古屋市史政治篇一、五三九頁に収録されているが序文と図八葉と田中道磨の讃歌を除いている。原本は寛政四年の序文(一東利助)があるが刊年を欠いている。おそらく私家版とし出されたものであらう。

- (5) 煩をさけて敘述を省いたが、天明三年頃、尾張領の庄屋の中で御救命殿の施興・自普請発企の例は極めて多い。

五 運動の支持者と礎足

今まで述べてきた改革運動の実相は、たとえ礎足がこの村最高の家格の出目であつたにしろ、強力な支持層を背景に持たなくては実行することはできなかったはずである。この支持層はどうしたもの連であつたか、また加藤礎足の政治的限界はどこにあつたかを述べておきたい。

まず、一連の村政改革運動を推進したと思われる人物を選び出して石高を示したのが第二表である。持高は天明期のものがないのでその前後を表示した。この持高を第三表の階層表と対照してみると、ほぼ、上層農であることがわかる。だから、今まで度々くり返して述べたように農民上層による本百姓制の共同体の防衛のための運動であつたことが判明する。しかも、明

持 高	明和8年	文化6年
無 高	[20]戸	[70]戸
1石以下	95	90 (2)
1石以上	21 (1)	30
2石以上	11 (2)	12 (5)
3石以上	5 (1)	7 (1)
4石以上	2	3
5石以上	7 (5)	4
10石以上	4 (3)	8 (7)
20石台	1 (1)	1 (1)
30石台	1 (1)	0
50石以上	1 (1)	1 (1)
計	[168] (15)	[225] (17)

註 ()内は2表の人物の持高分布を示す。
「」内は推定戸数である。

儀ニ志無御座、此間迄も御手代衆と馴合居申候と相見申候、此者退役不被仰付候而ハ難成人物ニ御座候

一 (一宮村) 年寄仙古義 算筆も相模通不申、甚牢劣志之者ニ而、大郷之年寄杯相勤候人物ニテハ無御座候、都而御風儀ニ害をなし候義多ク有之様ニ相聞申候、何人親義表向甚宣ク相見、内心私慾深キ者ニ御座候

この「人物善悪」の報告は、村方における一揆蜂起を恐れた代官が、「百姓方と同心ニ而為反騒ニ動候輩」(内達)ニ村役人の動向を磯足を通して捉えようとしたのである。この磯足の反農民的行動からも草莽の国学の限界と基盤の一端が、何ものであつたかを暗示しているであらう。

またこの礎足の人物評定をみると第一には風儀に志が厚いか否かという立場、天明改革の立場と、第二には下層農への仁慈の有無から評定していることがわかる。また、村落指導者に善なる人物を選び、これを藩政の中に掌握することによつて改革の実をあげることに、逆に悪い人物を村落指導者とすることは天明改革の徹底した施行に害となる事を述べている。しかし、礎足の指摘する悪庄屋が、果して農民下層からも悪庄屋といわれたいか否かについては疑問がある。要するに彼の善惡の規準は藩政の一環の中における農民上層としての立場にすぎなかつたのである。

支	持	者	明和8年持高	文化6年持高	月集銭	平州入門者	天明頃の役職
1	加半	磯	15,073石	14,009石	200文	○	本陣・問屋
2	浅	衛	14,876	22,926	132	○	村庄屋・宿年寄
3	七	衛	2,638	2,433	132	○	脇本陣・船庄屋
4	九	衛	65,546	13,928	132	○	村年寄
5	甚	八	23,623	59,580	664	○	村年寄・宿年寄
6	三	衛	8,404	2,377	64	○	村年寄
7	茂	四	11,628	15,938	332	○	村問屋
8	伊	衛	34,104	0,673	332	○	村年寄
9	九	兵	6,196	3,787	200	○	村年寄
10	与	衛	2,733	2,174	64	○	組頭百姓
11	治	郎	9,969	2,174	132	○	頭上
12	勤	吉	7,181	18,756	200	○	同上
13	亦	七	6,592	14,760	132	○	同上
14	彦	郎	3,548	11,943	200	○	同上
15	太	郎	1,602	2,788	0	○	同上
16	亦	衛	?	0,351	64	○	同上
17		七	?	11,736	200		?

註 月集銭とは民恵銭運動の時、月集積立に参加したものの月当り残高をさす。平州入門者欄の○印は入門したものをしめす。

動が始まり、田中道磨の他界（天明四年十月四日）にともない寛政元年には宣長に入門し、彼の著述がみられるのもこの頃からである。一方また、寛政頃から、村内における出入が激増し、磯足他界後の文政十二年には、村民が二派に別れて、この村最大の出入が起つたのである。

要するに藩政の、上からの規制・表面的な仁政に対し、もはや、こうしたごまかしと強圧的な政治が、適用しないものであることを磯足は身を以て体験したのである。武士と農民との基本的な階層意識の相剋、農民の心情を媒介せずして実現される政治の矛盾に、彼は絶望したのである。絶望した彼は歌や句の席に連なり、雅友との交際によつて感覚的世界に逃避したのである。彼の直面した課題は、一面に、この時代における草莽の国学が体験しなければならなかつたことでもあつたのである。

(1・2) 前掲拙稿「歴史学研究二一九号」一四頁。

(3) 「歴研」前掲稿で人見とみられる人物に報告したとしたが、その後検討の結果尾崎の方がよいように思われる。

(4) 比較的知られた人物との交渉をあげると植松有恒・井上士朗・石塚龍磨・大館高門・大矢重門などである。その他、彼の門人の多い美濃方面への旅行が多い。

(5) 寛政五年四月十五日宣長は太平を伴なつて磯足宅に一時泊している。その後、村内の雅友（頭百姓）を交えて歌会を催している（稿本全集四・八九一頁）。

総括

以上述べてきたことを最後に総括しておこう。

国学が展開した時点は、農民闘争の激化にともなう本百姓制的封建村落の共同体が大きく動搖し、下層農の抵抗に下から突き上げられた頭百姓層が、村政実施の政治的理念を切実に求めた時点であつた。農民の下から力を吸上げながら、新しい村落秩序を確立するための、構造的矛盾の解決の理念として、こうした段階で加藤磯足は国学に志向したのである。一時、折衷派儒学に入門したことはあるが、この場合、彼の学問の発展の過程としてではなく、現実の村政指導者としての政治的課題解決の要請のためであつた。しかしこの学問思想は上からの絶対服従を説くものであつただけに、農民の中に地盤を提供するものではなかつた。

また磯足の村政改革運動は下層農の抵抗の所産として農民上層による支配権の確立を目ざしたものであつたが、農民闘争を一時的に鈍化させる以上には出なかつたのである。

要するに村方支配者の危機意識Ⅱ農民闘争激化に対応して、農民上層の中に、国学が政治的課題解決の理念として展開したのである。

以上、国学の社会経済史的意義を加藤磯足を中心として草莽の基盤と、その学問の性質への追及を試みたのである。

(三四年六月)

なお本稿は社会経済史学会第二八回大会（於松山商大）でその要旨を報告したものであることをつけ加えておきたい。